

少年院在院者の不注意, 及び多動・衝動傾向と自尊感情との関連

東京福祉大学・大学院 松浦直己

Empirical research on relationship between inattention, hyperactivity, impulsivity and self-esteem in inmates of a correctional facility

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare MATSUURA, Naomi

要 約

目的: 本研究の目的は, ①矯正教育を受けて自尊感情に変化は見られるのか ②発達特性は自尊感情に影響を与えているのか, である。

対象: 平成17年5月～平成19年6月の期間内に, A少年院に入院し一定期間の矯正教育を修了した114名を調査対象群とした。全て男性で平均年齢は17.4歳(14歳～19歳)であった。

結果と考察: Rosenberg版自尊感情尺度を使用して, 対象群に実施したところ, 入・仮退院時で自尊感情の有意な変容は認められなかった。発達の問題性と自尊感情には, 密接な関連があることが明らかにされた。発達の問題性は自尊感情に影響を与えている可能性が示唆された。

【キー・ワード】 少年院, 発達の問題性, 自尊感情

Abstract

THE AIM OF THE STUDY: The aim of present study is ① to clarify the effect of correctional education in self-esteem ②to examine whether developmental difficulties exert influences on self-esteem.

OBJECTIVE AND METHODS: The object group was 114 adolescents who entered juvenile training school by July, 2005 and graduated by June, 2007. And all was boy, the mean age was 17.4 years (14-19). The object group was completed ① self-esteem scale ② Buss-Perry Aggression Questionnaire for Japan ③ AD/HD Youth Self Report ④ Shin Tanaka B IQ scale(non-verbal group intelligence test).

RESULTS AND DISSUCUSSION: Result of self-esteem scale, we could not confirm significant change or improvement on self-esteem when they entered and graduated to school [t (113) =1.28, p=.204]. The score of AD/HD-YSR was correlate with self-esteem significantly. It was suggested that developmental difficulties exert negative influences on self-esteem.

【Key Words】 juvenile correctional facility, developmental difficulties, self-esteem,

問題の背景と研究の目的

青少年問題は社会的な課題となっているが、中でも少年非行に対する関心は高い。社会に大きな影響を与えるような事件が起こると、極端な原因論追及や因果関係についての推測が展開されるが、実証的な資料に基づいた分析は稀少である。加害者が「普通の子」であったとか「いきなり型」であったことが過大に解釈されることがあるが、現時点では粗暴的非行事例の特徴を「いきなり型」・「普通の子型」として説明することは適当ではない(岡邊 et al, 2005)との報告がある。非行化した少年の特性についての多面的調査を実施し、得られた資料から実証科学的事実を導き出すことが重要といえよう。

縦断的追跡調査を基盤とする発達疫学研究の発展により、非行を含む行動の問題の危険因子が明らかになってきた。Moffitt (1990) は New Zealand の Dunedin で大規模発達疫学調査を実施した。1000人以上の母集団から 435 人を無作為に抽出し、3歳児時点で注意欠陥障害 (Attention Deficit Disorder; ADD) を診断された群とそれ以外の群を 15歳まで追跡した。その結果、ADDと診断された約半数が非行化したこと、幼少時期の攻撃性の高さは青年期の行動の問題と密接に関連していることを明らかにした。Biederman ら (2001) も注意欠陥/多動性障害 (Attention Deficit/Hyperactive Disorder; AD/HD) 児を追跡した結果、不注意や多動性が見られる幼児は、逸脱行動や非行といった外在化する問題のみならず、内在化する問題(うつ、不安障害等)でも予後が悪いことを指摘した。また、不注意や衝動・多動性の徴候が顕著な子どもほど、後になって反社会的行動を表出させやすいことも実証的に示した。このように、AD/HDの行動特性と非行を含む反社会的行動との親和性を示す研究は豊富に存在する (Biederman et al, 1993; Fergusson et al, 1997; Connor et al, 2003; Lee et al, 2004)。

残念ながら日本でこのような大規模な縦断的疫学研究は実現していないが、松浦らは全国で複数の少年院での調査を実施しており、欧米の先行研究と符合する結果を集積しつつある(松浦 et al, 2005, 2007a)。少年院在院生の中に、AD/HDの他に学習障害 (Learning Disorder; LD) や広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorder) 等の発達の問題を有する少年が存在する可能性が示唆されつつあり、臨床的にも注目される(松浦, 2006; 松浦 et al, 2007c, d)。

同様に、非行と自尊感情、攻撃性との関連にも多くの研究者が注目してきた。低い自尊感情が非行や反社会的行動などの外在化する問題を表出させやすい (Rosenberg et al, 1989; Fergusson et al, 2002) と主張する研究者は多く、臨床的にも合致するといえよう。一方で、低い自尊感情と外在化する問題との直接的関連は見られない、という逆の指摘も存在する (Bushman et al, 1998; Kirkpatrick et al, 2002)。

低い自尊感情と外在的問題行動が関連するとの仮説に立った研究は、以下に述べる3つに分類できる (Donnellan et al, 2005)。Rosenberg は低い自尊感情が社会との紐帯を弱体化させ、その結果として社会的不適応や非行行動の増大につながるとした。Hirshchi (1968) の Social Bonds Theory も同様な指摘をしている。人間中心主義的心理学者として知られる Rogers は問題行動表出メカニズムを、“肯定的自己感をもてないことにより、心理的な問題を抱え、攻撃行動が惹起されやすくなる”

(Rogers, 1961) と説明している。ネオフロイト派とされる Horney は幼少時期のコンプレックスや屈辱感（低い自尊感情も含む）が攻撃性を高め，反社会的行動を動機づける (Horney, 1950) ，と説明している。

しかし，このような低自尊感情仮説は一貫した結論を得ておらず，実証されているとはいえない (Donnellan et al, 2005) 。Baumeister ら (2005) は，非行者の自尊感情が低いという証拠はどこにもないと指摘し，暴力や犯罪との関連が強いのは低い自尊感情ではなく，むしろ非現実的な高い自尊感情であり，歪んだ自己愛性が問題であることを実証的に示した。“低い自尊感情が暴力を引き起こす” という固定的観念を振り払うことにより，より有用な研究が展開できると主張した。このように，低い自尊感情が将来の外在的問題行動につながるという低自尊感情仮説は，一方では支持されつつも，実証科学的な裏づけに欠けるという指摘も多い (Donnellan et al, 2005) 。

松浦らは複数の少年院施設で在院者の自尊感情や攻撃性に関する調査研究を行ってきた。その結果，年齢と性別をマッチングさせたコントロール群と比較して，少年院在院者の自尊感情が顕著に低いことが明らかにされた (松浦 et al, 2005) 。関連研究の対象者には本研究でも使用している複数の発達特性スクリーニングテストを実施している。発達スクリーニングテスト調査結果から，施設を問わず少年院在院者には共通する発達の困難性が存在することが示唆されている (松浦, 2006) 。

関連領域の先行研究が明らかにしたことを踏まえ，本研究では以下の2点を明らかにすることを目的とする。①矯正教育を受けて自尊感情に変化は見られるのか ②発達特性は自尊感情に影響を与えているのか，である。

対象と方法

調査対象群 平成17年7月～平成19年6月の期間内に，A少年院に入院し一定期間の矯正教育を修了して仮出院した118名の内，全ての資料に不備のない114名を調査対象群とした。全て男性で入院時の平均年齢は17.4歳（14歳～19歳）であった。

質問紙

(1) 自尊感情尺度 (Rosenberg 版)

Rosenberg (1965) により作成された，自尊感情尺度の10項目を，山本らが邦訳したものをを用いた (山本 et al, 1982) 。Rosenberg は他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく，自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている (井上, 1992) 。また自身を「非常によい (very good)」と感じることではなく，「これでよい (good enough)」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えている。自尊感情が低いということは，自己拒否，自己不満足，自己軽蔑を表し，自己に対する尊敬を欠いていることを意味している (遠藤, 1992) 。このような背景から，本論では「自尊感情」 (self-esteem) で統一して使用する。あてはまる (5点)，ややあてはまる (4点)，どちらともいえない (3点)，ややあてはまらない (2点)，あてはまらない (1点) の5件法で回答を求めた。入院時と仮退院時に同様のものを実施した。

(2) 新田中B式知能検査（非言語性集団式知能検査）

田中らによって標準化された非言語性中心の集団式知能検査である。少年鑑別所では鑑別の基礎資料として、入所者全員に本検査を実施している。簡便に実施することが可能であり、非言語的能力を測定する指標としては優れていることが指摘されている。

(3) AD/HD-YSR（自己記入式AD/HDスクリーニングテスト）

いくつかの少年院では、少年の発達特性をアセスメントするために自己記入式AD/HDスクリーニングテストを実施している。これはDSM-IVをもとに、小栗が矯正施設用に作成したものである（小栗, 1999）。不注意に関する9項目、多動衝動性に関する9項目、計18の質問項目より構成されている。回答者に対し、「小学校3～4年生ころまでの自分のことを思い出しながら」記入することを求めている。質問に対して、(1)なかった、(2)ときどきあった、(3)よくあった、(4)わからない、で回答し、回答の(1)(4)は0点、(2)(3)は1点として集計した。DSM-IVの基準に従い、「不注意関連」で計9点、「多動衝動性関連」で9点とし、合計得点は0-18点の値をとる。松浦らの研究により信頼性と内的一貫性が確かめられ、標準化作業が進められている（松浦 et al, in press）。また、男子の cutoff point は14点であることが示されている。本研究対象群114名の内、14点以上のAD/HD疑いあり群は28名（24.6%）であった。

(4) 日本版 Buss-Perry 攻撃性尺度

Buss（1992）の質問紙を日本版に標準化した日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（Buss-Perry Aggression Questionnaire, BAQ）（安藤 et al, 1999）を用いた。この質問紙は言語的攻撃（verbal aggression）、身体的攻撃（physical aggression）、敵意（hostility）、短気（anger）の4尺度において得点化される尺度構成を持っている。攻撃性の概念の細分化については統一した見解がないのが現状であるが（山崎, 2002）、この質問紙により少年院在院者の全体的な攻撃性が測定されると考えられた。

インフォームド・コンセント 対象群における調査では、少年の発達特性を捉えた上で、効果的な矯正教育を実施していくことや、テストで得られた結果は統計的に処理して研究に使用することがあることについて、保護者会で十分に説明を行っている。少年本人の記載にあたっては、記入内容が本人にとって不利益にならないこと、不明な点が存在すれば担当教官に遠慮なく質問できること、等が確認される。また質問紙実施の手順や管理については、全体の管轄である法務省矯正局と、厳密な協定書を交わした上で適正に処理されており、最大限に倫理的妥当性を考慮している。

解析の手順と統計学的検定 解析にあたっては、入院時・仮退院時の自尊感情の変容を捉えるために対応のあるt検定を行った。相関分析により変数間の相関係数を表し、発達的問題性と自尊感情の関係性をみた。更に自尊感情の得点の高さと発達的問題性との関連を分析するため、自尊感情尺度得点を高得点群・中得点群・低得点群の3群に分類した。3群に分類する基準として cutoff point を $M \pm 1.5SD$ とした。このような cutoff point の設定は諸領域で使用されている（Glass et al, 1987; Sakata et al, 1996; Squires et al, 1997; Kristen et al, 2005）。次に、導かれた cutoff point

を適用した上で，群間比較を行った。有意水準は5%未満とした。統計分析はSPSS13.0J for Windowsを使用した。

結 果

(1) 入・仮退院時の自尊感情の変容

Rosenberg 版自尊感情尺度を使用して，対象群に実施したところ，入・仮退院時で自尊感情の有意な変容は認められなかった [t (113) =1.28, p=.204] (表1)。すなわち矯正教育期間に於いて，自尊感情の変化は限定的であった。

表1 自尊感情尺度における入・仮退院時の変化

	度数	平均値	標準偏差	t値	df	P value
入院時	114	30.1	6.0	1.28	113	.204
仮退院時	114	30.9	6.9			

n.s

(2) 記述統計量及び相関係数

各因子の記述統計量及び変数間の相関係数を表2に示す。AD/HD-YSRと自尊感情に特徴的な関係性が検出された。すなわち，入院時の自尊感情とAD/HD-YSRの不注意得点に負の相関関係が見られたが，仮退院時の自尊感情とAD/HD-YSR得点には相関関係が見られなかった。

入院時の攻撃性は，AD/HDスクリーニングテストの不注意，多動衝動及び合計点と強い相関関係にあった (p<.001)。一方で入院時の自尊感情とは負の相関が認められた (p<.05)。

仮退院時の攻撃性と多動衝動得点には正の相関関係が認められた一方で，自尊感情との関連性は認められなかった (n. s.)。すなわち入院時と仮退院時の攻撃性と他の特性の関連に変化が見られたと言えよう。

表2 各因子の記述統計量及び変数間の相関係数

	平均値	標準偏差	度数	相関係数									
				1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.		
1. 不注意合計点	6.2	2.5	114	-									
2. 多動衝動性合計点	4.2	2.4	114	0.46 ***	-								
3. AD/HD合計点	10.4	4.1	114	0.86 ***	0.85 ***	-							
4. 田中B式IQ	4.1	13.4	114	-0.13	0.07	-0.03	-						
5. 入自尊心	30.1	6.0	114	-0.24 **	0.04	-0.12	0.03	-					
6. 入攻撃性	78.2	13.1	114	0.45 ***	0.39 ***	0.49 ***	-0.07	-0.20 *	-				
7. 仮退自尊心	30.9	6.9	114	-0.10	-0.01	-0.06	0.20 *	0.47 ***	-0.15	-			
8. 仮退攻撃性	81.9	15.2	114	0.14	0.27 ***	0.24 **	-0.01	-0.02	0.50 ***	-0.08	-		

注1) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

(3) AD/HD-YSR得点が自尊感情に与える影響 (表3)

次に，AD/HD-YSR得点と自尊感情との関係を解析した。まず入院時の自尊感情尺度得点の高さを基に対象群を分類した。M+1.5SD以上の高自尊感情群 (A1 ; n=10)，M-1.5SD以下の低自尊感情群 (A3 ;

n=10), その中間の中自尊感情群 (A2 ; n=94) とした。AD/HD-YSR 得点と自尊感情との関係を明らかにするために、不注意得点, 多動・衝動性得点, AD/HD-YSR 合計得点それぞれに於いて、一元配置の分散分析を行った。その結果, 不注意得点が自尊感情に与える影響は有意であった [F(2, 111)=4.00, p<.05]。Tukey の HSD 法を用いた多重比較によれば, A1 と A3 群間, A2 と A3 群間に有意差があり, 不注意得点の高さが低自尊感情に与える影響が示唆された。一方, 多動・衝動性得点が自尊感情に与える影響は有意ではなかった。

更に, AD/HD-YSR 合計得点が自尊感情に与える影響も有意であった [F(2, 111)=3.81, p<.05]。多重比較によれば, A1 と A2 群間に有意差があり, 高自尊感情群は他の群と比較して AD/HD-YSR 合計得点が低いという関係性が示唆された。

表3 因子別に見た各群の平均値及び分散分析の結果

不注意得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	4.3	2.6	94	6.2	2.4	10	7.2	1.6	4.00 [*] A1<A2 [*] , A1<A3
多動・衝動性得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	2.7	2.8	94	4.5	2.2	10	3.4	2.7	3.23 ^{n.s}
AD/HD-YSR 合計得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	7.0	5.0	94	10.7	4.0	10	10.6	3.4	3.81 [*] A1<A2

注1:A1=高自尊心群, A2=中自尊心群, A3=低自尊心群

注2:有意な差が見られたもののみ記した

注3:* p<.05

考 察

(1) 入・仮退院時の自尊感情の変容

大川ら(2000)は矯正協会付属中央研究所の一連の研究で、少年院生対象に入・仮退院時の自尊感情の推移を検討している。一般群と比較検討していないが、仮退院時では有意な自尊感情の高まりが見られ、矯正教育の効果が確認できたと報告している。しかしながら初入院群と再入院群、及び年少者と年長者では自尊感情の変化にばらつきがあり、一定した傾向ではなかった。本研究では入・仮退院時で自尊感情に大きな差がないことが確かめられた。若干の質問紙や手続きの違いが存在したことを前提として、両結果には明確な違いが見られたといえよう。

一方松浦ら(2007b)の先行研究により、別の少年院で同様の質問紙と手続きにより自尊感情の推移を評価したところ、本研究とほぼ共通した結果が得られた。この研究では性別と年齢をマッチングさせたコントロール群を設定しており、少年院在院者が著しく低い自尊感情を有していたことも確かめられている。更に2つの調査の入・仮退院時の平均値も近似しており、少年院在院者の特性として実証的資料が集積されたと考えられる。

仮退院時の少年は入院時と比較して、学力、体力や対人関係能力及び就業能力いずれの面でも秀で

ており、社会復帰に向けて臨床的には彼らの自尊感情の高まりが期待されたが、質問紙ではそのような結果は得られなかった。これらの解離はどのように説明されるか、一定の見解は得られていない。

その理由として、これまでの研究成果より2つの理由が考えられる。1つは少年院在院者の極端な逆境の養育環境である。児童期の虐待経験や不適切養育は、青年期以降の心理的特徴に決定的影響を与えよう。また深刻な罪を犯した後悔の念や罪悪感も微妙な影響を与えようと考えられる。

2つめは測定尺度の問題である。自己肯定意識尺度の下位尺度である、「充実感」では入・仮退院時の測定で極めて高い伸びが認められた。矯正教育期間において、「頑張った」「勉強ができるようになった」「自分もやればできる」と感じるができる体験を蓄積した現れであろうと思われる。自尊感情の変容は限定的であった一方で、自己に対する充実感是非常に高まったのであった。しかしながら、大川論文の結果の相違を十分に説明するに足るとは言えないであろう。

James (1982) が指摘するように、人は満足・不満足に対する客観的理由とは無関係の、ある平均的な自己感情を持っており、自尊感情とはそのようなものである。Trzesniewski ら (2003) は自尊感情とは生涯を通じて安定性を持っていると指摘しており、その変容は難しいのかもしれない。

(2) 記述統計量および相関係数

AD/HD-YSR の不注意、多動・衝動性、合計点と、入・仮退院時の自尊感情には極めて特徴的な傾向が確認された。不注意得点が入院時の自尊感情と負の相関があったことは、発達の問題性が自尊感情に影響を与えていた可能性が示唆されたと考えられる。

攻撃性と不注意、多動・衝動性にも強い相関関係が示されたことにより、これらの特性は互いに影響を与え合っていると考えられる。特に入院時において攻撃性と発達の問題性には強い関係が見られた。攻撃性と非行との関連研究は豊富に存在し (Trzesniewski et al, 2006) , 多くの研究報告は、非行に至る者は攻撃性が高く、攻撃的行動が頻発し、しかもそれが合理的手段であると認識している、と結論づけている (Nasby et al, 1980; Dodge et al, 1987) 。Kim-Cohen ら (2005) は大規模縦断的疫学調査の結果、4, 5 歳時点で青年期の行為障害を予知することは可能であるとし、その最も重要かつ決定的因子は攻撃性と反社会的行動であるとしている。注目すべきは発達障害と攻撃性との関連である。衝動性が障害の中核である AD/HD 児らにとっては、攻撃性が直接的攻撃行動につながりやすいという背景がある (Halperin et al, 1992; Atkins et al, 1993) 。Moffitt (1990) は Dunedin における birth cohort study で、早期に多動・衝動性等の特徴を示し、攻撃性が強い男児が非行化する比率が高く、予後転帰も不良であることを実証的に示した。

このように多くの非行研究に於いて、非行行動と攻撃性は強い親和性があり、発達の問題性 (AD/HD の中核症状である、不注意、多動・衝動性を含む) の有無や深刻度は青年期以降の予後に重大な影響を与えることが明らかにされている。深刻な非行化群と思われる少年院在院者を対象とした本研究結果でも、早期の発達の問題性と攻撃性に密接な関連があるという、先行研究と符合する結果が得られた。本邦では初めてのこのような資料を更に蓄積し、解析していくことで、これらの複雑な関係が解明されていくであろう。

(3) AD/HD-YSR 得点が自尊感情に与える影響

高自尊心群 (A1 群) は AD/HD-YSR 得点が低いということは、予想された結果と符合していた。多動・衝動性得点において有意差はなかったが、不注意得点で有意差が認められた、ということは、「同じ間違いを繰り返す」「何度言っても忘れてしまう」という行動特性がより自尊感情に影響を与えている可能性がある。不注意・不適切な言動により、周囲から叱責・非難されるケースは多いと推測され、対象群の多くの少年もこのような経験をしてきたと思われる。

総合考察

いくつかの横断的調査結果より、AD/HD-YSR 得点と自尊感情に関連が検出されたことから、発達的問題性は自尊心に影響を与えていることが明らかとなった。

また、数年間にまたがる縦断的調査結果より、少年院在院者の自尊感情の推移の特徴が明らかにされた。ここでも発達の問題は無視できない因子であることが確かめられたと同時に、松浦らの先行研究と驚くほど近似した結果が得られたことから、少年院在院者の共通する特徴が導き出されたと考えられる。

しかしながら多くの課題も残されている。本研究で使用した質問紙は、回顧式かつ自記入型のものである。本人しか知り得ない情報が収集可能である一方で、ある程度のバイアスがかかっていることは否めない。また、入・仮退院時の心理特性についても、多数の因子が影響していると考えるのが妥当であるため、安易に矯正教育評価につなげるべきではないだろう。

また、得られた結果はある程度我々の仮説と符合するものであったといってもよいが、発達的問題性や低い自尊心がどのように非行行動につながっていくのかはまだ明らかにされていない。今後心理的特性と問題行動発現とのメカニズム解明が重要な課題になるとと思われる。本研究のような実証的知見に基づき、更に研究を展開する必要がある。

引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之：日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討。心理学研究, 70 : 384-392. 1999.
- Atkins, M.S. and Stoff, D.M. : Instrumental and hostile aggression in childhood disruptive behavior disorders. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 21 : 165-178. 1993.
- Baumeister, R.F., Campbell, J.D., Krueger, J.I. et al. : Exploding the self-esteem myth. *Scientific American*, 292 : 70-77. 2005.
- Biederman, J., Faraone, S.V., Doyle, A. et al. : Convergence of the Child Behavior Checklist with structured interview-based psychiatric diagnoses of ADHD children with and without comorbidity. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines*, 34 : 1241-1251. 1993.

- Biederman, J., Mick, E., Faraone, S.V. et al. : Patterns of remission and symptom decline in conduct disorder: a four-year prospective study of an ADHD sample. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 40 : 290-298. 2001.
- Bushman, B.J. and Baumeister, R.F. : Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: does self-love or self-hate lead to violence?. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75 : 219-229. 1998.
- Buss, A.H. and Perry, M. : The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63 : 452-459. 1992.
- Connor, D.F., Edwards, G., Fletcher, K.E. et al. : Correlates of comorbid psychopathology in children with ADHD. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 42 : 193-200. 2003.
- Dodge, K.A. and Somberg, D.R. : Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, 58 : 213-224. 1987.
- Donnellan, M.B., Trzesniewski, K.H., Robins, R.W. et al. : Low self-esteem is related to aggression, antisocial behavior, and delinquency. *Psychological Science*, 16 : 328-335. 2005.
- 遠藤辰雄 : セルフ・エスティーム研究の心理—セルフ・エスティームの研究の視座—. In :(ed.), 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 *セルフ・エスティームの心理学*. ナカニシヤ出版, p.8-25, 1992.
- Fergusson, D.M. and Horwood, L.J. : Male and female offending trajectories. *Development and Psychopathology*, 14 : 159-177. 2002.
- Fergusson, D.M., Lynskey, M.T., Horwood, L.J. : Attentional difficulties in middle childhood and psychosocial outcomes in young adulthood. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines*, 38 : 633-644. 1997.
- Glass, C.A., Fielding, D.M., Evans, C. et al. : Factors related to sexual functioning in male patients undergoing hemodialysis and with kidney transplants. *Archives of Sexual Behavior*, 16 : 189-207. 1987.
- Halperin, J.M., Matier, K., Bedi, G. et al. : Specificity of inattention, impulsivity, and hyperactivity to the diagnosis of attention-deficit hyperactivity disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 31 : 190-196. 1992.
- Hirschi, T. *Causes of delinquency*, University of California Press, Berkeley, 1968.
- Honey, K. *Neorsis and human growth*, Norton, New York, 1950.
- 井上祥治 : セルフ・エスティームに関連する研究—自己概念—. In :(ed.), 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 *セルフ・エスティームの心理学*. ナカニシヤ出版, p.48-56, 1992.
- James, W. *Psychology : the briefer courser*, 岩波書店, 1982.
- Kim-Cohen, J., Arseneault, L., Caspi, A. et al. : Validity of DSM-IV conduct disorder in 41/2-5-year-old children: a longitudinal epidemiological study. *American Journal of Psychiatry*, 162 : 1108-1117. 2005.

- Kirkpatrick, L.A., Waugh, C.E., Valencia, A. et al. : The functional domain specificity of self-esteem and the differential prediction of aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82 : 756-767. 2002.
- Kristen, P. and Elena, P. : Diagnostic Accuracy of the Astructured Photographic Expressive Language Test. *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 36 : 103-115. 2005.
- Lee, S.S. and Hinshaw, S.P. : Severity of adolescent delinquency among boys with and without attention deficit hyperactivity disorder: predictions from early antisocial behavior and peer status. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 33 : 705-716. 2004.
- 松浦直己 : エビデンスからみた非行のリスクファクターと複合的相互作用. こころの臨床ア・ラ・カルト, 25 : 255-261. 2006.
- 松浦直己・橋本俊顕 : 非行化した女子の発達の・環境的逆境性と相互作用—発達スクリーニングテストと ACE 質問紙結果から—. 鳴門教育大学情報教育ジャーナル高度情報研究教育センター, 4 : 29-40. 2007a.
- 松浦直己・橋本俊顕・十一元三 : 少年院における発達障害を視野に入れた矯正教育効果分析(I) —少年院生の心的特性と入院時の意識の変容—. *LD 研究*, 16 : 199-212. 2007b.
- 松浦直己・橋本俊顕・十一元三児童青年精神医学とその近接領域, in press.
- 松浦直己・橋本俊顕・宇野智子他 : 少年院における心理的特性の調査—LD・AD/HD 等の軽度発達障害の視点も含めて—. *LD 研究*, 14 : 83-92. 2005.
- 松浦直己・橋本俊顕, 十一元三 : 少年院在院生における認知的特性の調査. *LD 研究*, 16 : 95-106. 2007c.
- 松浦直己・岩坂秀樹・藤島清他 : 多様な発達の困難性のある少年に対する, 矯正教育における一事例. *LD 研究*, 16 : 332-344. 2007d.
- Moffitt, T.E. : Juvenile delinquency and attention deficit disorder: boys' developmental trajectories from age 3 to age 15. *Child Development*, 61 : 893-910. 1990.
- Nasby, W., Hayden, B., DePaulo, B.M. : Attributional bias among aggressive boys to interpret unambiguous social stimuli as displays of hostility. *Journal of Abnormal Psychology*, 89 : 459-468. 1980.
- 小栗正幸 : LD, AD/HD と少年非行(1)—なぜ非行領域からの報告が少ないのか—. 日本 LD 学会第 8 会大会発表論文集, 194-197. 1999.
- 岡邊健・小林寿一 : 近年の粗暴的非行の再検討—「いきなり型」・「普通の子」をどうみるか—. *犯罪社会学研究*, 30 : 102-117. 2005.
- 大川力・長谷川宜志・田島秀紀他 : 在院少年の意識の変容に関する研究 (その 1) . 矯正協会中央研究所紀要, 10 : 49-101. 2000.
- Rogers, C.R. *On becoming a person*, Princeton University Press, Princeton, 1961.
- Rosenberg, M. *Society and adolescent self-image*, Princeton University, Princeton, 1965.
- Rosenberg, M., Schooler, C., Schoenbach, C. : Self-esteem and adolescent problems: Modeling reciprocal effects. *Sociological Review*, 54 : 1004-1018. 1989.

- Sakata, Y. and Nishida, H. : Comparison of two fetal growth curves in screening for high-risk neonates. *Acta Paediatrica Japonica; Overseas Edition*, 38 : 629-633. 1996.
- Squires, J., Bricker, D., Potter, L. : Revision of a parent-completed development screening tool: Ages and Stages Questionnaires. *Journal of Pediatric Psychology*, 22 : 313-328. 1997.
- Trzesniewski, K.H., Donnellan, M.B., Moffitt, T.E. et al. : Low self-esteem during adolescence predicts poor health, criminal behavior, and limited economic prospects during adulthood. *Developmental Psychology*, 42 : 381-390. 2006.
- Trzesniewski, K.H., Donnellan, M.B., Robins, R.W. : Stability of self-esteem across the life span. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84 : 205-220. 2003.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子: 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30 : 64-68. 1982.
- 山崎勝之: 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法. In : (ed.), 山崎勝之・畠井哲志 *攻撃性の行動科学*, ナカニシヤ出版, p.4-38, 2002.

